

山形大学附属博物館報22

THE MUSEUM OF YAMAGATA UNIVERSITY 1996. 3. 1

目次

附属博物館について教えてください.....	伊藤健雄 (1)
資料紹介 — 唐式鏡 —	(3)
平成7年度事業報告	(4)

附属博物館について 教えてください

館長 伊藤健雄

学生「先生、山形大学の小白川キャンパスに博物館があるって聞いたんですが、一体どこにあるんですか。」

先生「生協書籍部の前の通りから附属図書館に向う右かどにシャレた看板が立っているんで、あることは知られているらしいんですが、はっきりした場所を知らない人が多いようだね。図書館の玄関を入り、入館ゲートを通って左奥の階段を上ると、3階に博物館の展示室と事務室があるよ。」

学生「誰でも自由に見学できるんですか。」

先生「そう、平日の午前9時から午後5時まで開館しているから、その間なら誰でも見学できる。大学の教職員や学生ばかりでなく、一般の人たちも自由に利用できるようにしているんだ。あ、それから、入館料は無料だよ。」

学生「大学の博物館というと、ちょっとイメージが浮かびにくいんですが、博物館にはどんなものが展示してあるんですか。難しい研究資料かなんかがズラッと並んでいるんだろうな。」

先生「いやいや、そんなことはない。展示室の入口を入ると、まず最初は自然史関係の資料がある。県内各地の岩石や鉱物の標本、いろいろな化石、貝類や甲殻類、魚類などの海産動物の標本、鳥類や哺乳類の剥製などが、ガラスケースの中に展示してあるよ。よく整理された資料だよ。」

学生「へえー、普通の科学博物館なんかと変わらないんですね。」

先生「ここにある標本の大部分は、山形大学を退官された先生や現職の先生方が、ご自分の研究を通して集められたものなんだ。研究成果の一部が、君たち学生や一般の人たちの勉学の役に立っている訳だね。」

学生「特に貴重なものはありますか。」

先生「まあ、いろいろあるけど、サンリಂಗエルの標本かな。このカエルは退官されたO先生が20年程前に台湾の奥地で発見された新種で、最初に登録したとき使われた完模式標本なんだ。種の基準となっている貴重な標本だよ。」

学生「なるほど、他にはどんなものが——」

先生「自然史関係の奥には考古資料や歴史資料、民俗資料などがあるな。博物館の初代館長を18年間も勤められたN先生が、苦勞して収集された資料が骨格になっている。旧石器類や縄文時代中期の『注口土器』など、縄文から古墳時代までの出土品や遺物が揃っている。」

学生「歴史資料はどうですか。」

先生「江戸時代の武士や庶民の生活に関する資料や交通運輸に関する資料が多いようだな。大きな木の一枚板を使った『荷駄賃制札』は大石田町にあったもので、国立歴史民俗博物館に展示してあるレプリカの現物だよ。江戸時代に船頭の中で船頭が使った『船頭笥』は、金具が沢山付いた頑丈な造りで、いかにも男の調度品といった風格があるな。」

学生「郷土玩具なんかもあるんですか。」

先生「米沢の相良人形のいいのが揃っている。古くなって顔が欠けたり色が剥げたりはしているが、素朴な味わいが溢み出ているいいもんだね」

学生「古い簞笥から人形まで、まるで骨董屋の店先みたいですね」

先生「うん、確かにそんな感じもあるかな。でも、ただばらばらに集めて、薄然と置いてあるんじゃない、時代や地域や項目ごとに整理して、お互いの関係が理解できるように、展示に工夫をこらしてあるんだよ。山形の歴史や昔の人々の暮らしをよく分かってもらいたいと、博物館の人たちは、展示の配列や解説文にも、随分気を配っているように聞いているな」

学生「大変な仕事なんですね」

先生「博物館の仕事は、資料を並べて見せるだけじゃないんだよ。いろんなところから様々な資料を集めて来て、それを調べる。そして利用しやすいように整理して登録するという、言わば人目に付かない陰の仕事が沢山ある。これには資料についての専門的な知識が必要になるんだ」

学生「博物館の専門家、先生、学芸員というのがそれなんですか」

先生「そうそう。学芸員というのは国が認定する資格で、博物館法という法律で決められた授業の単位を修得した人や、国家試験に合格した人に与えられるものなんだ。山形大学にもこの資格が取れる授業があるんだよ。博物館では、認定に必要な科目のうち「博物館実習」を担当している」

学生「一般の人とのつながりはどうなんですか」

先生「生涯学習の一環として、毎年、一般の人たちを対象とした公開講座を開いている。今年度は13回目で、『博物館に遊ぶ』というテーマだった。講師はほとんどが山形大学の教官で、それぞれ自分の研究成果の一端を、分かりやすく話しておられたようだ。高校生から随分お年を召された人まで30人ばかりが受講し、和気あいあい、楽しそうだったな」

学生「ところで先生、これはぜひ聞きたいと思っていたことなんです、国立大学が博物館を持っているというのは、あまり多くないように思うんですけど、大学博物館の目的というか、役割というか、何なんですか」

先生「いいところを突いて来たね。それは大事な質問だと思う。いま日本には、ピンからキリまで何千という博物館施設があるが、大学の博物館は

ほんの数える程しかない。大学の数からみた割合で言えば5パーセントにも満たないんだ。ほとんどの大学が博物館をもっているイギリスやドイツは別格だが、その他の欧米諸国と比べてもえらい違いだ。日本の大学では、これまで博物館の重要性を認めて来なかったという表れかな。だから大学博物館の目的や役割については、人によって随分考えが違っているんじゃないだろうか。大学の位置付けや性格によっても一律ではないように思われる」

学生「先生のご意見は——」

先生「まず最初に、大学の博物館は誰のためにあるのか、という問題だが、わたしは、ごく当たり前のことだろうけれども、第一には大学の構成員、つまり教職員や学生のための施設であると考えている。教官は、自分の講義や演習、実験などに博物館を利用し、また研究成果を博物館にフィードバックすることで、一層効率的な利用を可能にすることができると思う。さらに学外の研究者と資料を対象とした情報交換や共同研究を行い、もっと多面的に研究を発展させることができる」

学生「学生は——」

先生「学生は、博物館の資料を教材とした、より即物的で具体的な授業を通して、創造的な深求心を育てることができるだろう。また収蔵されている多くの資料を調べることで、学習や研究の幅を広げることができる。講義室だけの授業では得られない効果だな」

学生「なるほど、楽しい授業になりそうですね」

先生「また職員は、博物館を見学したり、博物館の仕事にかかわることで、自分の職場である大学の内容や水準、アクティビティなどを知り、獲得した知識を日常の仕事に反映することができる。大学の構成員が、それぞれの立場で博物館を利用し、育てて行くことで、博物館の役割はますます高まって行くんじゃないだろうか」

学生「一般の人に対してはどうなんです」

先生「第二の対象は一般人、つまり広く社会に対して開かれている、ということだろうな。かつては、大学の研究は象牙の塔と皮肉られ、研究者も俗世間を意識した研究は邪道として避けて来たが、今はそんな時代じゃない。開かれた大学が標榜されて、進んで学外との交流を図るようになって来た。大学の教育や研究の成果を社会に還元するのは、大学の重要な使命の一つでもある、とい

う考えが強まって来たし、また社会も大学にそれを求めるようになって来たんだな

学生「公開講座や特別展は、社会に対する還元とみていいんですか」

先生「そう。還元というにはいささか面映いけれど、そんな心掛けで実施しているものだね」

学生「ねらいはよく分かりました。でも先生、一般の人にしてみれば、大学の博物館はまだまだ利用しにくいんじゃないですか」

先生「残念ながらその通りだ。まずPRが不十分で博物館の所在や中身がよく分からない、興味をもって見に行こうと思っても土曜・日曜は休館している、平日に出掛けられたとしても玄関入ってからややこしい手続きがあったり展示室までの案内表示が付いていないなど、決して親切とは言えないね。反省して、早く見直さなければならぬところだろうな」

学生「反省ついでに、山形大学の博物館に足りないもの、博物館の弱みを教えてください」

先生「弱みねえ、弱みは沢山あるんだが、やはり『人』と『予算』だろうな。人については、博物館で通常勤務している人は2人だけ。それも事務補佐員と呼ばれる、言わば非常勤の人で、定員はない。もちろん専任の教官や事務官はゼロ。教育研究施設である博物館に、専門分野の教官がいないというのは致命的だね。退官して大学を去られる先生が、収集された研究資料を託そうとしても、責任をもって預かれぬのが現状だ」

学生「大変なんですね」

先生「それと予算。博物館の運営費は全学の予算から工面して配当される。人件費にほとんどが消えてしまう額で、台所は火の車だ。新しい事業にはなかなか手が回らない状態だね」

学生「なんだか憂鬱な話になってきましたが、将来の明るい日処はないんですか」

先生「現在の体質を改造して、新しい構想のもとに生まれ変わろうという動きが始まっているんだ。博物館の運営委員会の中に将来計画検討委員会ができて、話し合いが進んでいる。近々、計画がまとまると思うよ。それに、昨年夏、学術審議会の学術資料部会が出した『ユニバーシティ・ミュージアムの設置について』という中間報告は、社会に開かれた大学の窓口としての、大学博物館の重要性と早急な設置とを強調したもので、博物館の将来計画の推進にとって、願ってもない追い風に

なるものとして歓迎しているようだよ」

学生「博物館の時代がやって来そうですか」

先生「ぜひ、そうあってほしいね。山形大学は総合大学だから、潜在するエネルギーはそれだけ多様で大きいと言える。そのエネルギーを結集し、学問の感覚を磨く施設として発展させたいものだね」

学生「先生、お話どうもありがとうございました。早速これから博物館を見学させていただきます」

(教育学部・教授)

資料紹介



唐式鏡

弥生時代より奈良時代に至るまで、日本における鏡は大陸からの舶載鏡か仿製鏡（中国製の鏡を模倣した鏡）でした。それが、平安時代に国風文化が栄えるようになると、中国風の文様で代わり松・山吹・梅・鶴・鷺・雀など、日本人になじみの深い自然風物が、鏡背面に描かれ鑄造されるようになりました。そうした純和風文様が確立したものを和鏡と言います。この資料は、奈良時代にもてはやされた唐鏡とその和鏡の中間に位置するもので、唐鏡に倣いながらも和風要素の加わった、唐式鏡と呼ばれるものです。

直径10.5cm、縁高0.4cmの青銅製で鏡胎は薄く、輪郭に弧状の花弁を型取り、文様は判然としませんが円形の紐（紐を通す中心のつまみ）の周りに双鳥と唐草を対称的に配置した、典型的な唐鏡系統の構図になっています。唐式鏡は過渡期の形式ではあったものの、唐鏡への根強い憧れと従来の慣習などから祭儀によく使われ、鎌倉時代初期まで重用されていました。円鏡が主流の中でこのような多弁式花鏡は特徴的であり、特に五花鏡は日

本独特の形式です。梅花を思わせる形が好まれて、平安時代後期に流行しました。この資料は腐食が激しいため、樹脂加工による修復を施しています。羽黒山頂にある御手洗池（鏡ヶ池）より出土した池中納鏡の一つと言われていますが、本館の前身である山形師範学校郷土室からの収蔵品であり、現在ではその経緯や詳細は定かではありません。

古来、光を反射し姿を映す鏡に人々は畏敬の念を抱き、鏡を霊的な力を持つ神聖なものとして、御神体となしたり自身の心を乗り移らせた身代わりとしました。そうした鏡への信仰が、同じく姿を映し出し、物を清め命を育む水への崇拝と結びつき、神の宿る湖沼へ鏡を投入して祈願する習俗が生まれたものと考えられます。その信仰はやがて、神仏習合の浸透と共に山岳修験道に取り入れられ発展しました。山岳修験の地として早くから栄えた出羽三山（月山・湯殿山・羽黒山）の羽黒山においても、古くは鏡ヶ池が御神体そのものであったのです。

池中から鏡が出土した事例は全国にあり、山形県内でも羽黒山以外に、湯殿山神社、立川町鉢子（羽黒山の東北麓）、酒田市飛島法木、そして山寺立石寺の各池より出土しています。

しかし羽黒山出土の池中納鏡は特別に数が多く、発掘され現在所在の明らかなものは約500面、特に去られ所在不明のものや未だ池中に眠っているであろうものも併せると膨大な量に上ります。戦後に羽黒山頂の経塚など随所から土中鏡も発掘されていますが、それらも含め大部分は平安時代後期、次いで鎌倉時代にかけてのものです。時代が下るほど少なく、江戸時代のもののはほんの数点しか発見されていません。

羽黒山の納鏡信仰は、羽黒修験の変遷に伴い鎌倉時代以降廃れていってしまったとされています。しかし和鏡は反対に、更なる隆盛を遂げていきました。唐式鏡は和鏡の勢いに押され姿を消し、和鏡の変化と進展につれて、鏡は宗教的道具から専ら化粧道具として扱われるようになっていきます。

（附風博物館 山本敦子）

平成7年度事業報告

平成7年度に本館で実施した博物館実習の参加人数は次のとおりです。

	人文学部	理学部	教育学部	計
1 回目 7/24～7/27	11	22	5	38
2 回目 7/31～8/3	17	5	9	31
3 回目 10/2～10/5	14	6	12	32
計	42	33	26	101

今年度も参加希望者が多く、2回では取まらずに3回に分けての実習となりました。

また、公開講座は「博物館に遊ぶ」をテーマに、博物館の実際の資料に触れ自らそれを扱うという内容で、古文書解読の初歩、植物さく葉標本の作成、岩石や美術資料の調査等を受講者に体験していただくことができました。

特別展は「郷土作家による和の様式美」のテーマで、収蔵品の中から掛け軸、刀剣類を中心に展示し、11月6日から12日までの7日間の会期中、学内外200名ほどの方々が観覧されました。

（附風博物館 高橋加津美）

平成6年度見学者総数

一般成人	個人	164 (人)
	団体	0
大学生	個人	180
	団体	367
児童・生徒	個人	0
	団体	50
合計	個人	344
	団体	417
	総数	761

（平成6年度は増改築工事のため4月から7月までのみ閉館）

編集後記

中央図書館の増改築に伴い、改装中だった本館が、平成7年6月1日、坪井学長・前田村事務局長をお迎えして新装開館の運びとなりました。図書館正面玄関には、坪井学長の揮毫による表札が掲げられ、新たな歴史が始まりました。

博物館長を勤められ、学芸研究員としても長く本館の運営・活動にご尽力をくださった教育学部・横山昭男、人文学部・矢野 直樹教授、また学芸研究員として女性らしい視点から貴重なご意見をいただいた教育学部・青木和子教授が、この3月末日をもって定年退職を迎えられることになりました。ご退官に際し、深く感謝の意を表します。

山形大学附風博物館館 622, 1996. 3. 1 発行
編集兼発行人 山形大学附風博物館
(〒990) 山形市小白川町一丁目4-12
(TEL) 0236-28-4930 (直通)